

## 『武蔵野』の意図と背景

田 淵 幸 親

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

### 要 旨

浪漫主義者あるいは自然主義者とされる国木田独歩が『武蔵野』を書いたのは明治31年(1898)のことであった。当初は『今の武蔵野』と題されていたが、明治34年(1901)に出版するさい『武蔵野』と改められた。この作品で独歩は独自の境地を示したし、ごくありきたりの武蔵野の風景のなかに詩趣をみだし、自然のなかで安堵するという変動・変革期を経過した明治中期の日本社会の在り様も写しだしている。『武蔵野』の成立における独歩の意図と背景を本稿では探ろうとした。

### キーワード

国木田独歩、武蔵野、浪漫主義、自然主義、空間の思想

### 目 次

- はじめに
- 『武蔵野』の成立
- 明治30年前後の社会情勢と独歩
- 独歩と透谷
- おわりに

### はじめに

国木田独歩は明治4年(1871)に千葉県銚子で生を受け、明治41年(1908)肺結核で没した。貧困のなかでの佐々城信子との結婚生活の破綻という試練に見舞われながらも、浪漫主義あるいは自然主義と称される境地にとどまりつづけた。信子の出奔に遭遇した独歩は、『欺かざるの記』<sup>1)</sup>(明治26～30年)で自身の内面の片鱗を、「今の苦悩を逗子に於ける愛楽に比べ来れば、われは高山の絶頂より深谷の最底に投げこまれしが如し<sup>2)</sup>と吐露し、懊悩の克服のため「丈夫らしかれ<sup>3)</sup>と自己を鼓舞する。「たをやめぶり」と「ますらをぶり」は本居宣長と賀茂馬淵によって抽出された日本人の2つの在り方であるが、独歩はそのうちのひとつである「ますら

をぶり」を選択し用いた。キリスト教徒である独歩は、彼の落ち込んだ心を鼓舞するために随所で神に祈っているが、伝統的価値概念も独歩から消失してしまっているわけではなかった。また『国民新聞』従軍記者として日清戦争にも従軍し、従軍記『愛弟通信』(明治27年)によって注目されるようになった。入り組んだ社会的状況と個人的状況とを乗り越えたとき、独歩はことさら伸びやかな自然への憧憬を膨らませていった。

その独歩が武蔵野の風景のなかに詩趣をみだし、自然の与えた印象と面影を、当時失意のどん底にあった彼の心情によって昇華し、印象的な文章として描ききったのが『武蔵野』<sup>4)</sup>(明治31年)という作品であった。『武蔵野』で記

される自然に対する憧憬は直感的・直截的に、「山林に自由存す<sup>5)</sup>」という詩で明白に述べられている。そこでは、

山林に自由存す  
われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ  
嗚呼山林に自由存す  
いかなればわれ山林をみすてし

あくがれて虚栄の途にのぼりしより  
十年の月日塵のうちに過ぎぬ  
ふりさけ見れば自由の里は  
すでに雲山千里の外にある心地す

瞥を決して天外を望めば  
をちかたの高峰の雪の朝日影  
嗚呼山林に自由存す  
われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ

なつかしきわが故郷は何処ぞや  
彼処にわれは山林の児なりき  
顧みれば千里江山  
自由の里は雲底に没せんとす

と詩われ、武蔵野の逍遙が失意の独歩にとってどのような意味をもっていたのかをうかがわせるに充分である。またこの詩は、都市の人工的空間のなかにどっぷりと浸ってしまっている現代人への警告とも受け取っていい。

そうした都市の人工的空間の意味とその空間によって醸成されるコスモロジーに分析のメスを入れたのは、成沢光であった<sup>6)</sup>。成沢は、自然空間の必要性についての幸田露伴の指摘を牽き、「すき間、路地、空き地、野原が減少する、つまりは無機能的な空間が縮小することによって、『銷耗』『疲弊』した精神は、人為的空間においてのみ『自然』を回復することができる<sup>7)</sup>」とする露伴の考えから、「健康のための『散策』が、近代のコスモスにふさわしい都市中間階級の行動様式<sup>8)</sup>」となったことを指摘している。

ここでいう人為的空間とは、人によって作りだされた自然空間である「公園<sup>9)</sup>」を指しており、まったくの自然空間の意味ではない。成沢が牽いた露伴の『一国の首都』(明治32年)にみられる指摘は以下のとおりである。

公園は都市の肺臓なり。吐故納新の機能の肺臓に存することの人身に至要なるが如く、腐を転じて鮮となす公園の靈妙なる嘗作の都会に対する必要は言ふまでもなし。本来都会は繁盛なれば繁盛なるに従つて自然の状態には遠ざかり行くものなれば、従つて其住民を人事の複雑なる組織中に繫定し、其天真の元気を銷耗せしむると共に、一方に於ては物質的に空気の混濁甚しき一団の不自然境を現出して、其中に生息する人間を疲弊困屈せしむるなり。この時に際して樹木蒨茂して草竹叢生せる閑地の市中に存在するは、一方において物質的の不良の状態を救ひ、他方において精神上の鬱抑を医し、空気の変換代謝をなし、元気の振作回復をなす、その功実に測るべからず。公園は実にこの必要に応じて都府に設置せらすべきものなり。この故に都府の大かつ盛なるを加ふるに従ひ、公園の数も多くその設計も善美好良の度を加へんことを要す。都会をして長く老朽せざらしめんことを希望し、常に清新の状を具して活潑に嘗作せしめんことを欲すれば、勢ひ完全なる公園を多くして其樹木草竹の空気に及ばず靈妙なる嘗作を利用し、又娯楽の具を備へて人民を安慰し、これによりて暫く人事の紛綜せる繫縛中より脱して、自然の懷裏に神を暢べ気を和するを得せしめざるべからず<sup>10)</sup>

独歩の『武蔵野』の影響を受けての成立か否かはにわかには判定しがたいが、明治20年代から30年代にかけて、浪漫主義・自然主義の台頭

という底流のなかで「自然回帰」が意識されるようになっていったことは確かである。またそこには、自由民権運動の影響から「自由」と「民権」が可視的形態をとったばあい、露伴や独歩にみられる「自然」への意識の対応を生み出したという理解も成り立とう。ただ独歩のばあい、彼の意識する「自然」は彼のいう「想」という思索手続きを経た「自然」であることに注目する必要がある。

#### 『武蔵野』の成立

『武蔵野』は当初『今の武蔵野』と題して雑誌『国民之友』の明治31年1月号から2月号にかけて掲載された。「今の武蔵野」と題したのは、「今の武蔵野」と「昔の武蔵野」とを比較することを想定していたためかもしれぬが、「今の武蔵野」も「昔の武蔵野」も人に美と感動を与えたという意味では同様であると認識したゆえに、「今の」を削除し「武蔵野」を表題として出版することとなった（明治34年）。『武蔵野』は、独歩の目で見た当時の武蔵野の自然を叙事詩的に表現した作品である。そのことは『武蔵野』の序にあたる《一》で、

昔の武蔵野は实地見てどんなに美であつたことや、それは想像にも及ばむほどであつたに相違あるまいが、自分が今見る武蔵野の美しさは斯る誇張的の断案を下さしむるほどに自分を動かして居るのである。自分は武蔵野の美と言つた、美といはんより寧ろ詩趣といひたい、其方が適切と思はれる<sup>11)</sup>。

と述べ、武蔵野の自然への感動を表明していることによく現れているといえよう。武蔵野に代表される自然は、その自然のなかで呼吸する人間の息吹を包み込んでいる自然であった。独歩のいう「武蔵野」とは、自然と人間との調和したすがたに与えられた一般的呼称であったのかもしれない。それは、

野やら林やら、たゞ乱雑に入り組んで居て、忽ち林に入るかと思へば、忽ち野に出るといふ様な風である。それが又た実に武蔵野に一種の特色を与へて居て、こゝに自然あり、こゝに生活あり<sup>12)</sup>

という記述でも察することができるし、全編をつうじて随所に同様の記述を見出すことができる。独歩の自然に対する感動や、そこで生活する名もない庶民への深い同化は、いったいどこから出てくるのだろうか。

元来自然とは不規則で混沌としたものであり、規則的で直線的な人工的空間とは趣を異にする。そうした人工的空間秩序の拡大が日本の近代化過程であったとすれば、人工的空間秩序への抵抗（自然への回帰）が独歩に『武蔵野』を書かせた大きな要因であったといえよう。人工的空間秩序の拡大は、人の健康を蝕む。もちろん「江戸時代においても都市社会では、身体の健康に対する関心が高まり、さまざまな『養生』の論理と実践の方法（飲食、用薬、運動から鍼灸まで）が説かれた。外気の中の邪気・毒気を避ける必要も言われてはいたが、今や空間の人工的秩序化が身体の秩序と連動するものとして新たに認識されたことになる。しかも、自然の秩序が身体の秩序を貫くのではない。人為的に構成された空間の中においてのみ、身体の秩序は維持されるという論理が誕生する。そうであるとするれば、汚穢、悪臭等『混沌』『混乱』の要素をできる限り中心から排除することが、空間の政治学となり美学となる<sup>13)</sup>」という近代化によって構築された現代社会の秩序像は回復しがたい傷を人間に与えたことになる。独歩自身が自然回帰の効用に気づきながらも、その行動様式においては、「健康のための『散策』」を武蔵野を舞台として実行し、「近代のコスモスにふさわしい都市中間階級の行動様式」を露呈してしまうところに、このコスモロジーの執拗さがみいだせるのである。

## 明治30年前後の社会情勢と独歩

世情よく知られているように、『武蔵野』成立前に、独歩の人生観や文学観に大きな転機を与えた事件があった。それは佐々城信子との破局である。明治28年6月ごろ、新聞記者として従軍していた日清戦争<sup>14)</sup>から帰還し、佐々城家において催された『国民新聞』従軍記者慰労会<sup>15)</sup>で佐々城信子を知り、佐々城家の反対にもかかわらず結婚にこぎつけ、佐々城家との約束にしたがい神奈川県逗子に居をかまえた。しかし『国民之友』の編集を辞した独歩の生活は苦しく、この生活苦に耐えきれなかった信子は、独歩の両親との生活を始めてまもなくのころ出奔し、ついに離婚にいたった(明治29年4月)。信子との破局の苦悩が独歩の人生観や文学観に深みを加えていくことになるのであろうが、こうした苦悩を克服した独歩の落ち着いた心が武蔵野の自然やそこに展開される静かな営みをことのほかの感動をもって捉えることに成功させた要因でもあろう。

人はそれぞれさまざまな苦悩をもち、それを克服する過程でのみより大きな真理へと接近できるという過言ではない。心の落ち着きが観察の眼を鋭くし研ぎ澄ます。近代化過程の陥穽に陥りかかっているとはいえ、ゆったりとした精神風景が眼前に広がる武蔵野の自然とそこでの人びとの生活を詩的に映しだしている『武蔵野』の記述で、独歩の落ち着きを感知することができる。それほど余裕をもちはじめたのが、この時期の独歩であった。

作品を書くということは、その時々の自己を表現することにより自己を検証していくことと同義であり、その作品をそれ自体として完結することもさることながら、つぎの段階への礎石とすることを可能とする。動揺から立ち直った自己表現としての意味合いを強くもっているのが、『武蔵野』という作品であるといつてよからう。自然のなかに溶け込んで生活している人びとに対する共感と共鳴は、安っぽい運命論とは異なる。在りのままに在ることへの感動、換言

すれば、時間と空間の共有への感動は、心の落ち着きなくしては生まれまい。その意味では、『武蔵野』の成立時において独歩は、信子出奔の懊悩を克服しえたといえよう。

この時期の独歩を取り巻く状況は、自由民権運動の終焉とその後の虚脱状態からくる内省的傾向性を経て、日清戦争による鬱屈の霧散という一連の潮流のなかで理解されるべきであろう。とりわけ明治20年代の陰鬱は、自由民権運動の終息と切り離して考えるわけにはいくまい。明治20年代の陰鬱が明治30年代の文学運動開花の礎石となっていることを考えれば、自由民権運動についてひととおりまとめておくことが肝要となる。

自由民権運動とは明治7年(1874)ごろから帝国議会在開設される明治22年(1890)ごろまでつづいた日本最初の下からの政治運動であった。明治7年、板垣退助・副島種臣・後藤象次郎・江藤新平らによって提出された「民撰議院設立建白書」により醸成された気運は、それまでの地域的偶発的な一揆とは異なり、組織的であり全国的広がりをもせたところに特徴があった。したがって、このころ青年期をおくった独歩やのちに触れる北村透谷は、自由民権運動の影響を大きくうけるところとなった。しかも、自由民権運動のはなばなし展開と急速な衰退はきわめて対照的であり、人生そのものの縮図の観を呈していた。自由民権運動の急速な衰退の要因としては、運動そのものに内在する問題も指摘できるが、「『国家』から相対的に自立した『社会』の底が浅かった」<sup>16)</sup>点も見逃すことはできまい。つまり、「家族や職人組合といった中間団体が権力に対抗する力は強くなかった。さらに、『伝統』の体現者とも見られた皇室が、『開化』に率先して衣食住を西洋化した。宗教団体の自立性も弱かったから、奈良時代以来の長い歴史を持つ神仏混淆の祭祀を権力が強引に破壊したときにも、既成宗教の抵抗は限られていた」<sup>17)</sup>というところから推して、運動が受け入れられていく地盤が軟弱だったのである。

国権と民権の相克という観点からみれば、初期自由民権運動では民権に焦点があてられていたが、やがて帝国議会の開設が実現するや国権へとその重心を移行し、「国家」からの自立は達成しえなかったのである。そのことは、自由民権運動にあって左派の論客として活躍した中江

兆民でさえ、恩賜的民権から回復的民権への転換を主張しはするものの、民権概念のなかに明確に人権とよべる内容を含みえていなかったことによく現れている。自由民権運動の年譜はおおよそつぎのようである。

自由民権運動関係年表

年	月	事 項
明治7	1	民撰議院設立建白 愛国公党組織
	4	立志社創立
明治8	2	愛国社創立 大阪会議
	4	漸次立憲政体樹立の詔諭 新聞紙条例布告
明治10	1	地租軽減の詔
	2	西南戦争
明治11	4	地方官会議開催
明治12	3	愛国社第2回大会
	5	官吏政談演説の禁止
	8	越後新潟農民騒動 愛国社第3回大会
明治13	2	地方官会議開催
	3	愛国社を国会期成同盟会と改称 集会条例制定 国会開設願望書提出
	7	刑法法治罪法発布
	11	国会期成同盟会第2回大会
明治14	1	熱海会議
	3	「東洋自由新聞」創刊 4月廃刊 大隈立憲政体に関する意見書提出
	10	国会開設期日の決定 大隈参議罷免 自由党組織
明治15	3	改進黨および帝政党結成
	5	酒屋会議 「自由新聞」廃刊 東洋社会党組織 7月解散
	6	集会条例改正
	11	福島事件
明治16	3	高田事件
	4	新聞紙条例改正
	9	車界党組織即日禁止
明治17	3	地租条例制定
	9	加波山事件
	10	自由党解党 秩父事件
	11	名古屋事件
明治18	2	改進黨改組
	7	新聞紙条例改正
	8	大阪事件
	12	内閣制制定
明治19	10	旧自由党系全国有志大懇談会開催
明治20	7	条約改正無期延期
	12	3大建白運動 保安条例発布 新聞紙条例等改正
明治21	6	『政論』発行停止
明治22	1	官吏の公衆に対する政事演説解禁
	2	大日本帝国憲法発布

出所：『近代日本総合年表』岩波書店、1978、pp. 58-121. より作成。

この年譜でみて分かるように、運動の勃興と同時に政府は弾圧を強め、他方で立憲政体の準備にとりかかるという方式で臨んだ。明治17年の秩父事件をピークとして、自由党解党以降、自由民権運動は衰退していくのであるが、明治19年になって、後藤新平・星亨らを中心に旧自由党系の大同団結というかたちで運動は再開されたものの、その性格は地租軽減を目標とした地主の利害実現運動に墮し、条約改正を中心とした国権論的色彩の強いものとなっていった。もはや過日の自由民権運動の色彩はなかった。

独歩はここに登場した星亨(1850-1901)と親交をもっていた。星亨は築地の生まれで、陸奥宗光に接近して官界に入り、明治7年(1874)に横浜税関長を務めている。後にイギリスに3年ほど留学し、明治14年(1881)自由党結成とともにまもなく入党し、資金面で自由党に貢献する傍ら、「自由新聞」の経営を助け、また独自に新聞『自由の燈』を発刊した。こうした活動が、新興財閥三菱や改進黨の攻撃対象となったりもしたが、自由民権運動の衰退を憂い大同団結によって運動の復活を試みてみたが、自由民権運動の再興はなかった。明治22年(1889)再度洋行し、帰朝後第2回総選挙に出馬し当選している。衆議院議長という要職も務めたことがある。その後アメリカ特命全權公使、帰朝後憲政党の実権を掌握し、山県内閣との提携などで敏腕をふるった。明治33年(1900)政友会創立に尽力し、伊藤政友会内閣の逓信大臣となった。しかしその直後東京市議会議員に当選し、東京市参事会に勢力をもったが、同会議室で刺殺された。

星亨の感化と影響で独歩は政治家を志し、生地銚子方面に赴いたのは明治34年(1901)のことであった。この年独歩は、第一文集『武蔵野』を出版している。しかしこの年の6月21日、星亨が暗殺されたため、独歩の銚子行は中止のやむなきにいった。もし星亨が暗殺されなかったならば、独歩は政治に深入りしたかもしれない。以後政治家になることは断念したものの、

政治への関心はもちつづけた。このように、このころの独歩は内的世界と外的世界とのあいだを行き来していたのである。

#### 独歩と透谷

独歩と同様に、自由民権運動の洗礼を受けキリスト教の影響を受けた人物に北村透谷がいる。独歩と透谷は奇妙に類似した軌跡をたどっている。年齢的にも近接している2人がまったく未知であったとは考えられないにもかかわらず、この2人を比較考察した論文は管見によれば未聞である。そこで独歩と透谷を比較するために年表を作成してみた。

独歩も透谷も4歳違いではあるが、駆け抜けるような人生を送り、ほぼ同時代を生き苦悶したことは共通している。2人ともキリスト教徒となり、政治にも大きな関心もちつづけた。しかし時代状況が、明治22年を境として大きく変化し、やがて陰鬱な時代風景を醸しだしていくこととなった。そうした時代背景を2人は一身に背負っていたのである。

北村透谷は、独歩以上に自由民権運動の波をもろに被った。三多摩地方の左派民権運動のなかで、ほぼ1年間にわたり積極的に活動した。この間の透谷については従来あまり知られていなかったが、色川大吉を中心とする歴史研究者たちによってその輪郭が明らかになってきた。ことに色川大吉は、透谷について、その著書『明治精神史』において詳細に論及している。明治18年に政治運動からの離脱を決意した透谷は、明治25年にいたるまで三多摩地方をふたたび訪ねることはなかった<sup>18)</sup>。透谷は苦悩する魂の表現において、人間性の深い真実とその価値を、鋭い近代的自己分析をとおして、強烈に示していたのである。

また透谷は、キリスト教のなかでも社会的にラディカルな行動様式で知られるクェーカー派と緊密であった。それも彼の内面世界を純化する大きな要因であったのかもしれない。さら

## 独歩と透谷の年譜

独 歩		透 谷	
明治4年	銚子にて生誕	明治1年	小田原にて生誕
18	山口中学入学 20 退学	15	泰明小学校卒業 漢学塾入塾
20	東京専門学校英語普通科入学 (のち英語政治科移籍)	16	東京専門学校政治科、英文科入学 中退 この1年間に自由民権運動 と深くかかわる
24	1月受洗 3月退学	18	民権左派の企てた大阪事件を期に 政治運動から離脱
26	2月新聞記者 4月解雇 9月佐伯に赴任	20	三多摩民権運動の名士石坂昌孝の 娘ミナを知る。彼女の感化でキリ スト教入信
27	8月佐伯を去る 国民新聞従軍記 者として日清戦争に従軍	21	11月同女と結婚
28	6月佐々城信子を知る 11月結婚	22	創作活動に入る
29	4月上京 信子出奔		
30	創作活動に入る		
41	病状悪化 6月死去(37歳)	27	5月16日疲労と貧乏のため東京芝 の自宅庭で首を括り死す(25歳)

出所：『国木田独歩・田山花袋集（現代日本文学大系11）』（筑摩書房、1970）および『北村透谷・山路愛山集（現代日本文学大系6）』（筑摩書房、1969）より作成（下線は筆者）。

に、日本における最初の反戦運動機関紙ともいえる『平和』をクェーカー教徒加藤万治とともに創刊したのは明治25年3月であった。こうした運動にかかわる思考様式は、当然自己に対する深い洞察をとまなう。したがって、それまでの元禄文学復古や芸術至上主義の文学といった写実的古典的傾向とは異なり、文学創造主体の問題を重視する立場を透谷はとっていきようになるのである。そうした主張の中心となっていたのが雑誌『文学界』（明治26年1月～31年1月）であった。この雑誌を舞台として、透谷は人間の内面をみつめ、自我の根源的自由を求めたが、彼を取り巻く状況がそれを許さず、想世界 に立て籠もらざるをえなかった。『内部生命論』<sup>19)</sup>（明治26年5月）は、尾崎紅葉や幸田露伴らの元禄文学回帰に対して痛烈な批判を展開し、文学の現場で本質的な問題提起を行ったのである。透谷はこういう。

文芸は思想と美術とを抱合したる者にし

て、思想ありとも美術なくんば既に文芸にあらざ、美術ありとも思想なくんば既に文芸にあらざ、漢文妙辞のみにては文芸の上乗に達し難く、左りとして思想のみにては決して文芸といふこと能はざるなり<sup>20)</sup>

しかし、透谷の目指した世界の2分化、すなわち 実世界 と 想世界 という構図は、想世界 への逃避ないしは小市民的自己封鎖の傾向性を内蔵するものでもあった。時代の醸し出す悲愴な雰囲気は、ロマンチズムを基調とする透谷に、自我の自由実現の場として 想世界 を指定せしめてしまったのであった。島崎藤村は、透谷のこうした純粹さに深く感銘を受けた人びとのうちのひとりであった。

ともかく自由民権運動の衰退という現象は、透谷にとっても独歩にとっても彼らの思想の深層部分に深い傷を負わせた。石田雄が指摘するように「近代国家の形成は、一方において強力

な集権を必要とすると同時に、他方では、伊藤が『自から進んで国家共同の目的を達するが為に、鞏固堅實なる国家を組織するの大業に協心戮力せしむる』目的で『文明開化の域に進ましめ』ることを企図したように、たとえ最小限でも、国民的自主性の喚起装置を必要とした。そうした要請に対しては、封建的ヒエラルヒーの観念的支柱をなしていた儒教倫理は、直接これにこたえる適格性を有せず、一先ず後景に退くこととなる<sup>21)</sup>のであり、そこにキリスト者としての透谷や独歩の自由民権運動の潮流のなかで勇躍する契機があった。しかし早々にその契機は摘まれ、「一度後景に退いたかの観があつた儒教思想も、一旦自由民権運動が退潮期に入るや再び主要な政治的インドクトリネーションの具として前面に現れて来る<sup>22)</sup>」こととなったのである。こうした状況に対する抵抗者として独歩や透谷は懸命に批判の矢を研いだのではあるが、時代状況が彼らを翻弄してしまうのであった。

独歩は透谷に遅れること4年ではあるが、ヤスパースのいう限界状況の経験が、彼の内面世界を一層深いものにしていった。『今の武蔵野』で、独歩は深みを増しそして凄味も加えた観察者としての眼をみせることになる。自然描写はたんなる写実にとどまらず、写し取られた自然の上に独歩の精神世界を展開させるのである。落ち着いた精神の佇まいをみごとに表現しつつしているがゆえに、今日までこの作品は読み継がれてきたのであろう。さらに、これもよく指摘されることではあるが、移動する視点による自然の観察であるということを見逃すことはできない。社会変動のなかで、絶望的に自己を形成していかざるをえなかったこの時代の理性に特徴的な自己形成のあり方だったと言い換えてもよからう。社会的権威に背を向けて、貧しい庶民にかぎりない同情をよせるのも、独歩と透谷に共通した態度でもある。想世界に立て籠もってしまった透谷に対して、独歩は自然のままに自己の運命を受け入れる境地を開拓しよう

とした。そのひとつの試みがのちに『武蔵野』となる『今の武蔵野』であった。素直で自然なままのすがたが最も美しく且強いことを自分に納得させるための作業として独歩はこの作品を書いたのではあるまいか。

ただ独歩は『源叔父』の発表以後、10年ほどしか作家生活をしていない。その10年ほどの間にあっても創作活動に専念できたわけではなかった。新聞記者や編集者あるいは出版経営者としても多忙な日々を送っている。創作活動はそれらの合間を縫って行われていたような状況だった。それだけにいっそう『武蔵野』という作品が味わい深いものとなっていたのであろう。

おわりに

独歩は『余が作品と事実<sup>23)</sup>』で、これまでの作品の解説を行っている。『余が作品と事実』によれば、独歩の作品は以下の4種に分類できるという<sup>24)</sup>。

- 全く空想から人物も事件も出来上れる者
- 実際の人物若しくは事件にヒントを得たる者
- 事実の人物と事件が其小説の主要部を成せる者
- 実際の人物及び事件を其儘描写したる者

この4種のうちで が最も多く、 はきわめて少ないといい、『源叔父』『酒中日記』『富岡先生』『春の鳥』『巡查』『第三者』『空知川の岸边』『あの時分』『帽子』『牛肉と馬鈴薯』の各作品について数行の解説を加えている。比較的長い解説をしているのは、西園寺侯警護担当の巡查の居宅訪問を詳細に記した『巡查』という作品についてであり、そこでは「写生文なんて、くだらないものだ<sup>25)</sup>」と述懐し、

此巡查如きが若しお望みなら手帳を与へよ。きよろきよろせしめよ。記憶に止め

難き故事来歴、手紙の文句などは是非必要ならば、一寸拝借とでも言ふべし。本願寺の瓦の大サが解らずば梯子をかけて上るべし。実にくだらないことだ<sup>26)</sup>。

と唾棄するように言っている。さらに、「写生文など言はずに手帳文と言つた方が直截のやうな気がする<sup>27)</sup>」とまで言い切っている。

独歩が標的とした写生文には何かが欠けているから、ここまで強い口調で論及したのであるが、その欠けているものは何かといえ、<sup>30)</sup>とされるならば、独歩の「想」を解明する必要があるろう。

「想」に他なるまい。独歩は「余が作品と事実」で以下に示すように、3ヶ所「想」という語を用いている<sup>28)</sup>。

けれども此兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて初めて此一遍が作品となつたのである（源叔父）  
それが基となり余の想が出来たので、実際の小学校々長は今も健在である（酒中日記）

此少年が城山で悲惨な最後を遂げた事は余の想である（春の鳥）

では「おもひ」とルビをふり、では「さう」とルビをふっている。にはルビはないものの後段にあたるどころから「さう」と読むのが妥当であろう。「おもひ」と「さう」の相違が何であるのかにはわかには断定できないが、「实在の人物、実際の事件之れ自身が如何に面白く思はれても、之れを直ちに筆に上すは真の詩を得るに非ず。必ずこれを心底最も深き処に蔵して其発酵を待たざる可からず<sup>29)</sup>」としているところから推して、何らかの思想的昇華を媒介したものを作品とすべきであると独歩は考えていたといえる。また、独歩の「想」と透谷の「想世界」とを重ね合わせると興味深いものがみえてくるように思える。

透谷の「想世界」が理想実現のために準備されたものであったとすれば、独歩の「想」も彼の考えを展開するための土壌のようなものだったのかもしれない。ともかく、独歩の「本質は

むしろ知性的な浪漫主義者であり、その作品は浪漫主義から自然主義への橋渡しとしての位置にある<sup>30)</sup>とされるならば、独歩の「想」を解明する必要があるろう。

## 注

- 1) 『国木田独歩・田山花袋集（現代日本文学大系11）』筑摩書房，1970，pp. 175-221.
- 2) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 189.
- 3) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 191.
- 4) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』pp. 10-19.
- 5) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 173.
- 6) 成沢 光『現代日本の社会秩序 歴史的起源を求めて』岩波書店，1997，pp. 59-60.
- 7) 前掲『現代日本の社会秩序』p. 60.
- 8) 前掲『現代日本の社会秩序』p. 60.
- 9) 「公園」という語は、飯沼二郎・白幡洋三郎『日本文化としての公園』（八坂書房，1993，pp. 64-65.）によれば、明治3年に神奈川県宛てに出された外国人居留地への「公園設置要望書（原文英語）の訳文にみいだせるという。訳文では、Public Garden を直訳し「公園」としたようである。
- 10) 幸田露伴『一国の首都』岩波文庫，1993，p. 102.
- 11) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』pp. 10-11.
- 12) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 14.
- 13) 前掲『現代日本の社会秩序』p. 42.
- 14) 文芸評論家吉田精一は、筆者の理解と異なることもあるが、文学史からみた日清戦争をつぎのように位置づけている。  
日清戦争はわが国の独立戦争ともいべきもので、日本が近代国家として成立する上に、ある意味で欠くべからざる戦争であった。はなばなしい戦勝による歓喜と、三国干渉による屈辱は、国民の眼を海外の情勢に向け、一面では国権拡張・国粹主義的感情を、他面では世界主義的思想をつちかうのに力があつた。この両者は、ともに平行して存在し、年とともに後者が前者を圧していったのが、この期のだいたいの特色であつた。西欧の芸術文化を、より熱意をもって摂取しようとする傾向も、こういう風潮のもたらしたものである。  
吉田精一『近代日本文学概説 改訂版』秀英出版，1992，p. 24.
- 15) 相馬黒光『国木田独歩と信子』『国木田独歩・田山花袋集』p. 412.

- 16) 前掲『現代日本の社会秩序』p. 7.  
17) 前掲『現代日本の社会秩序』p. 7.  
18) 色川大吉『新編 明治精神史(色川大吉著作集 1)』筑摩書房, 1995, p. 39.  
19) 『北村透谷・山路愛山集(現代日本文学大系 6)』筑摩書房, 1969, pp. 145-149.  
20) 前掲『北村透谷・山路愛山集』p. 146.  
21) 石田 雄『明治政治思想史研究』未来社, 1971, pp. 27-28.  
22) 前掲『明治政治思想史研究』p. 29.  
23) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』pp. 164-166.  
24) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 164.  
25) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 165.

独歩の作品である『巡查』について、写生文から出発した夏目漱石は、「田山花袋君に答う」のなかで「愚見によると、独歩君の作物は『巡查』を除くの外悉く拵えものである」と酷評している。「拵えもの」についての漱石の理解は、以下のようになっている。

拵えものを苦にせらるるよりも、生きて居るとしか思えぬ人間や、自然としか思えぬ脚色を拵える方を苦心したら、どうだろう。拵えた人間が活着しているとしか思えなくて、拵えた脚色が自然としか思えぬならば、拵えた作者は一種のクリーエーターである。拵えた事を誇りと心得る方が当然である。ただ下手でしかも巧妙に拵えた作物は(例えばチューマのブラック・チューリップの如きもの)は花袋君の御注意を待たずして駄目である。同時にいくら糊細工の臭味が少くても、凡ての点に於て存在を認むるに足らぬ事実や実際の人間を書くのは、同等の程度に於て駄目である。

『夏目漱石全集第9巻』筑摩書房, 1976, p. 247.

- 26) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 165.  
27) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 165.  
28) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 164.  
29) 前掲『国木田独歩・田山花袋集』p. 166.  
30) 前掲『近代日本文学概説 改訂版』p. 47.

#### 参考文献

- 『国木田独歩・田山花袋集(現代日本文学大系 11)』筑摩書房, 1970.  
『北村透谷・山路愛山集(現代日本文学大系 6)』筑摩書房, 1969.  
成沢 光『現代日本の社会秩序 歴史的起源を求めて』岩波書店, 1997.  
飯沼二郎・白幡洋三郎『日本文化としての公園』八坂書房, 1993.  
幸田露伴『一国の首都』岩波文庫, 1993.  
吉田精一『近代日本文学概説 改訂版』秀英出版, 1992.  
色川大吉『新編 明治精神史(色川大吉著作集 1)』筑摩書房, 1995.  
石田 雄『明治政治思想史研究』未来社, 1971.  
『国文学 解釈と鑑賞 国木田独歩の世界』平成3年2月号, 至文堂, 1991.  
田中義久『人間的自然と社会構造 文化社会学序説』勁草書房, 1974.  
上山春平『歴史と価値』岩波書店, 1972.  
西田勝編『田岡嶺雲全集 第1巻』法政大学出版社, 1973.  
我部政男編『明治15年・明治16年 地方巡察使復命書(上)』三一書房, 1980.  
我部政男編『明治15年・明治16年 地方巡察使復命書(下)』三一書房, 1981.  
井出孫六・我部政男・比屋根照夫・安在邦夫編『自由民権機密探偵史料集』三一書房, 1981.  
夏目漱石『夏目漱石全集第9巻』筑摩書房, 1976.